

樺太（サハリン）

小林市雄さん

私は東京生まれ樺太^{からふと}育ち。大正15年6月、大工職で先に渡樺した父の後を追って、母に連れられて大泊⁽¹⁾から落合⁽¹⁾まで行って、ポンポン発動機船⁽²⁾で知取町⁽¹⁾に着いたが、港と言ってもまた浮橋に乗って上陸するが、すっかり船酔いし母子共に上陸板からザンブリ海上へ。6月で寒いかどうか忘れたが、お菓子のはいった白い柳行李^{やなぎこうり}と白い帽子が浮かんでいたのが、今でもはっきりと頭に残っている。

知取町^{しるとる}は、王子製紙工場が豊富な製紙原料の松を使って、新聞用紙を製造していた。⁽¹⁾敷香^{しすか}、知取^{しるとる}、豊原^{とよはら}、真岡^{まおか}に工場があった。

知取川^{しるとる}でも、奥地で伐採した松を水流を使って工場まで流す。冬に切った松を上流に組んでおいて春先の氷がとける頃、人夫が命がけで組んだ木の一部をはずすと、12尺から20尺の松の木が縦になり横になり物凄い状況で流れ下る、天下の絶景であった。この川は春になると、鮭^{さけ}、鱒^{ます}が川を真っ黒になって登ってくる。すると人々は長い竹の先にクサリ状の針金を上流から下流に下って引くと面白いように魚が引っかかってくる。

筋子^{しんこ}といって朝捕った卵を醤油^{しょうゆ}に漬けて晩に食べると、こんなにうまい物はない。身は、すぐ食べますが、野菜と漬けて冬の副食となる。これは密漁であるから時々警官が数人取り締まりにやってくる。捕まると、ぶんぐら⁽³⁾れ一晩⁽³⁾ブタ箱入りとなる。



夏になると冷たい川でも泳ぐ人が居たが、時々心臓マヒかなんかで死ぬ人もでる。また、町は10月頃から雪が降り、根雪⁽⁴⁾になるのは12月26日頃になる。この頃になる

と、あちこちペタン、ペタンと餅をつく音が聞こえてくる。で、つき終わったら、すぐ外に出しておくのと凍って夕方取り入れると凍り餅となり、火にあぶると、つきたてのようになりうまい。この頃になると猛吹雪となり、一寸先も見えなくなり、通勤で隣りを歩く人が急に見えなくなる。仲間と一緒に探しても見つからない。春に雪がとけてくると溝の中から見つかる。樺太最北の(オハ)には半官・半民の石油工場があった。⁽⁵⁾21歳になったら青年訓練所で兵隊訓練を受け帰隊中、市役所の職員が召集令状(赤紙)を持ってきて手渡してくれた(宗谷要塞重砲兵連隊に入隊せよ宿泊地は菅野旅館とす)⁽⁶⁾⁽⁷⁾(北海道稚内)。隣りに連隊本部があった。すぐに入隊、そこに自分の名前を書いた兵装があった。昔の砲兵は大きな人ばかりだったか、皆ダブダブ帽子、あげあげズボンを引きづって、8里の行軍つらかった。

遂に第二中隊のある宗谷岬についた。早速訓練が始まる。番号と号令がかかる。1, 2, 3, 4^シ, 5, 6, 7^{シチ}・・・と終わったらぶんなぐられた。お前らそんなに死にた^しいか、死地に行きたいかと。何の事かさっぱり判らない。4はヨシ^{しち}, 7はナナと呼ぶのは後で判ったが、叩かれ痛い思いで覚えたのを忘れない。^{たた}

かくて終戦となり、中隊命令により樺太出身兵17名だけ、古兵さんの車に乗りこんだが目的地の本斗⁽¹⁾まで行かず途中でおろされ、豊原まで歩いた。日本海方面に帰った兵15人は、東部から攻めてきたソ連兵に皆殺しになった。運命の差は紙一重。⁽⁸⁾

これが判ったのは10数年後、年金について調査のため内閣府に行って、調査の結果判った。私が樺太^{からふと}から引揚げたのは、昭和23年6月である。資料は何もない。大泊でソ連兵により日本人の物は全部差し押さえられた。

-
- 1 大泊・落合・知取・敷香・豊原・真岡・本斗...日本の領地下において樺太に存在した町。
 - 2 ポンポン発動船...炎玉エンジンを搭載した小型動力船。リズムカルな独特の爆音を立てて航行することから「ポンポン船」と呼ばれた。
 - 3 ブタ箱...夏の夜、蚊や害虫を防ぐため、四隅を吊って寝床を覆う道具。
 - 4 根雪...雪解けの時期まで残る積雪下方の雪。
 - 5 半官・半民...政府と民間とが共同で出資し、事業を営すること。
 - 6 要塞...戦略上の重要地点に設けられる、主に防衛を目的とした軍事施設。

7 重砲兵...長距離の射撃が可能な口径の大きい大砲で敵を砲撃するのを任務とする兵。

8 古兵...古くからいる現役の兵士。

飛行第 5 5 戦隊

前 田 勝 美 さん

戦争も終わりに近づいた昭和 2 0 年 3 月 , 我が整備隊は三重県の明野^{あけの}飛行場より第六航空軍に転属の命令を受け , 福岡へ行くと更に配属先が鹿児島島の飛行第 5 5 戦隊と決まり , 列車で知覧の飛行場に着いたが , そこには戦隊はいなかった。

幸いに憲兵隊があり尋ねると , 川辺郡の万世町 (現南さつま市) に飛行場 (当時軍の機密飛行場) があることが分かり⁽¹⁾ 軽便鉄道で移動したが , 整備隊は数人に分かれての民宿で飛行場へ往復していた。格納庫は爆撃でなくなり , 滑走路の先に堤防が有って外は海だった。この堤防がのちに悲劇を起こすことになる。ある朝 , 飛行場に行くと , 海軍の一式陸上攻撃機が不時着しており , 乗員はおらずそばに小便の入った⁽²⁾ 一升瓶が転がっていた。

この「一式陸攻」が水島で作られた事は戦後復員して分かった。またある時 , 米国製の「ポートシコルスキー」戦闘機が , オイルを機体に流しまっ黒になり , 滑走路沖の海岸に不時着して乗員が逃げる



所を逮捕したこともあった。またまたある日は , 我が戦闘機 (三式戦闘機キ 6 1 飛燕^{ひえん}) が次々と離陸している時 , 1 機が堤防に接触し火を吹いたので乗員を助けようと近づくと , 弾倉に火が移り 2 0 ミリの機関砲弾 (2 0 ミリ以下は銃と言った) が四方に飛び近づけなかった。

戦況ははげしく , 全国の古い機体や満州にあった練習機も特攻用に爆装 (無線機 , 機銃を下し 5 0 キロ爆弾を吊る^つ) して出て行った。我が 5 5 戦隊は特攻機を援護して沖縄

まで送るのが任務だった。夜は小学校で映画を町の人と見た。また、町長さんの家でバケツ⁽³⁾ぱい芋飴^{もら}を買ったことも。ガソリンが無いので動かなかったダットサントラックも飛行場通いになった。

薩^{さつ}摩^まに少しは馴^なれた頃、沖縄戦が終わり、我が55戦隊は元の小牧飛行場(名古屋)へ引揚げたが、終戦を前に最後の移動で大阪の泉佐野飛行場(現関西空港の入口)へ行き、戦は終わった。全機プロペラを下し車輪を外して復員の日を待つ事になる。



鹿児島弁を披露しよう

「おまんさーわ、がつついよかにせど。」

(あんたはぼっけえ男前じゃのう。)

-
- 1 軽便鉄道...軌道が狭小で、小型の機関車・車両を使用する鉄道。明治43年から大正8年まで、鉄道敷設法によらないで建設された鉄道。
 - 2 一升瓶...酒などの液体が一升(約1.8リットル)入るびん。
 - 3 芋飴...蒸したサツマイモを原料として、麦芽などを加えて煮詰めて作った褐色の飴。

戦車兵

富岡 喜美子 さん

⁽¹⁾徴兵検査で近衛兵に選ばれた彼は、「近衛兵なのでは、なまぬるい」と志願して戦車兵になりました。

戦後40何年も経って調べた結果「戦車第二師団第六連隊」とわかりました。戦中は部隊名など兵士の家族には全然わかっていませんでした。

昭和19年1月に大阪に入隊、1週間後満州勃利^{ぼつり}へ。8月12日勃利出発、8月30日釜山出発、9月10日門司港出発、それからの途中では、アメリカ潜水艦の攻撃に悩まされながら、無事に9月30日ルソン島に上陸、各地を転戦、20年1月末「戦車第六連隊は犠牲となってムニオスの町を死守せよ」との師団命令により、何日間かムニオスにとどまって、米軍の包囲による猛爆を受けながら戦っていました。

ルソン島に上陸した米軍の進路を阻み、日本の軍隊や、一般邦人達の退路⁽²⁾を確保する為の防御



陣地としてのムニオスにおける戦車第六連隊に対し、優勢な米軍の爆撃は凄まじいものであったそうです。

連日黒煙の上るムニオス方面を見ていた友軍の兵士たちは、「あの黒煙の下で戦車第六連隊は、果たして存在するであろうか」と祈りながら見ていたのだそうです。

その後20年2月6日「敵の包囲を突破して5号国道を北上せよ」と命令変更になり、戦車をすぐ移動できるように準備しようとしても、連日の爆撃により戦車のキャタピラは土に埋もれた状態になっていて、非常に困難を極めたとのこと。7日未明に出発した

ところ待ち構えていた米軍によって、戦車は全部⁽³⁾ かくざ 擱座、生き残った兵は徒歩で脱出したのだそうです。

ちなみに戦車第六連隊は総員 908 名で生還者 56 名、戦死者 852 名のうち、ムニオス脱出のとき実に 344 名の戦死者が出たそうです。戦車兵の彼もその時戦死ということになっています。

戦車第六連隊の防御戦闘は「世界でも稀な戦例^{まれ}と言える」と図書館で読んだ本にも書かれていました。またムニオス脱出後、大変な御苦労ののち生還された方より送られた資料によりますと、陸上自衛隊富士学校の教科書のコピーにも、その時のムニオスにおける戦車第六連隊の守備戦闘の内容が、日付け入りで 23 ページにわたり詳しく書かれていました。

南方で戦死された人の最後の様子は、一般の人はほとんど何もわかりませんので、戦車兵のお父さんは戦後、息子の戦死の状況が知りたくて、⁽⁴⁾ 引揚援護局へ足繁く通い「またあんたですか」と言われながら、いくらたずねても結局何もわからなかったと聞きました。そのお父さんは、毎年欠かさず⁽⁵⁾ 春の靖国神社大祭におまいりされていましたが、79 歳のとき「来年からはもうよう来ないからネ」と言って帰られたと聞きましたので、私が調べてみようと思いました。

新聞記事などでルソン島から生還された人のことが載っているのを手がかりに、次々とおたずねして^{つい} 終に戦車第六連隊の上官の人が、神戸市にお住まいで、軍の資料など整理されていることを知ることができました。戦後、40 年以上経っていましたが、その方と何度もお便りを交わし、数々の資料も送っていただきました。

お父さんは息子が大阪へ入隊の時、門まで送って行かれたと聞きましたので、それからのことを詳しく手紙に書き、ムニオス脱出のときの隊列のことまで、長い長いお手紙を書きました。私の書いた長い長いお便りを読まれたお父さんは、その手紙を家族にも見せないで、1 人で燃やされたそうです。後日家族の方のお話しで察することができました。それからのちにお父さんは亡くなられたことを知りましたが、私の手紙がお父さ

んを死なせる結果になったのでは・・・と、今も気になっています。

この文章を書きました「私」は「生まれたときからいいはずけ」でありまして、現在
89歳、数え年で90歳になります。

-
- 1 徴兵検査...一定の年齢に達した者に対し、兵役に服する資質の有無を判定するために身体・身上を検査すること。
 - 2 退路...逃げ道。
 - 3 擱座...戦車などが壊れて動かなくなること
 - 4 引揚援護局...内地(樺太・沖縄・千島を除く)以外の地域から内地に引き揚げる者などに対し、応急保護や検疫などを実施するために設置された事務所。
 - 5 春の靖国神社大祭...靖国神社(国家のために尊い命を捧げられた人々の御霊を慰め、その事績を永く後世に伝えることを目的に創建された神社)で行われる春季例大祭(神霊を慰め、平和な世の実現を祈る)のこと。

城外実戦体験

田 辺 康 市 さん

昭和19年11月初旬、岡山第10連隊に入隊し、中国の高平にある壘^{るい}第1477部隊独立歩兵第246大隊第三中隊に入隊した。

約2か月ぐらいの過酷な現地教育を受けて、初めて⁽¹⁾討伐と言う名目で、情報に基づいて敵地区とされる地域の集落に、

⁽²⁾糧秣^{りょうまつ}収集も兼ねて中隊長を先頭に出発した。自分は⁽³⁾軽機関銃を持って射手として参加する。1時間ぐらい山から谷へと歩いて行くが、幅5メートルほどの1本の道路が何キロも遥^{はる}か彼方の先までズーと見渡せる場所に来たとき、



日本ではこんな風景は全く見られない、中国は大きな国だなと感じた。と同時にこの壮大な距離を歩いて行けるのだろうか、不安な気持ちになった。でも戦友も皆一緒に行くんだから自分も行かなければ、と隊列に引きずられるように顎を前に出しながらついて行く。暫^{しばら}く行くと上官が「あッ、⁽⁴⁾狼煙^{のろし}が上がっているぞ気を付けろよッ。」と指さす方向を見ると、1キロほど離れた右横の小山の頂上あたりから不気味な白煙が信号用として波打つような形で上っている。と左側の小山の頂上からもそれに答えるかのよう^{のろし}に狼煙が上がった。我々の行動を察しての作戦信号なのか。と思った瞬間、両側の山の中腹あたりからパンパンと銃声が聞こえ攻撃してきた。挟み撃ちだ。部隊は直ちに応戦した。自分は上官の「軽機前エー」との命令で10メートルほどの前方の凹地に走り込み、上官の指示に従って激射した。初めての戦闘だ。機関銃の連射は体中にももの凄く響く。興奮して無我夢中だ。相手を殺さなければ自分が殺される。これが戦争だ。機関銃

を発射している場所は敵にはよく判るので集中的に狙われやすい。当然自分の近辺には無数の弾が飛んで来る。とその時、右耳の辺りが「ビシッ」と言う音がして、顔面の右半分が何かで殴られ麻痺した状態になった。当然撃たれたと思い「やられたッ」と言って手で右の顔を押さえて倒れた。傍にいた上官が「何処をやられたッ」と言って抱き起し、顔を押さえている手を取って見て「馬鹿野郎」と力いっぱいぶん殴られた。「起きて早く撃てッ、この馬鹿者がッ。」「ハイッ」と答えて飛び起きて射撃を始めた(至近弾

を受けると弾風の圧力で鼓膜が一時的に損傷し、頭半分に麻痺感が出ることもある)。間もなく敵の銃声は止んだ。時々銃声はするが弾は来なくなった。先発隊が銃声に気づき両側面から攻撃を仕掛けたらしい(先発隊とは斥候兵として、討伐に行く



目的地に秘かに先行して敵の様子を探る兵隊)「撃ち方やめ」、「前進」との号令で先発隊と合流して敵の後を追ったが、もう攻撃してくる気配は無いので追跡を止め帰ることにした。ところが帰りだすと、何処にかくれていたのか集落や物陰からパンパンと言う銃声とラッパやドラ、太鼓の鳴り物入りで「ドンドン、パイパイ、ジャンジャン、パンパン」と、何百人が追って来るのか想像がつかないほど強烈な音響を出して追ってくる。自分たちは初めての事なので何が何だかわからない。もう上官の側を離れず、命令に従って行動する以外は何もない。上官の命令で中隊は2分隊に別れ、1分隊は追ってくる敵を迎え撃ち、1分隊は100メートルほど後退して立ち止まり、援護射撃をしながら後方の味方を後退さすという作戦を繰り返し行って、ようやく安全な地域まで帰ってきた。そしてある集落で休憩した。何人が負傷兵がいたようだ。衛生兵が忙しそうに走り回っていた。自分はのどが渴いてカラカラだ。水筒の水も無いので水を貰いに民家

に入って老夫婦が居たので中国語で「リヤンスイ、シンジョー（水をください）。」と言ってみた。通じたのか笑顔で^{うなず}頷いて部屋の隅にある大きな^{みずかめ}水甕を指差した。「シエーシエー（ありがとう）。」と言って、そこにあった^{ひしゃく}柄杓で^{かめ}甕の水を^く汲み上げると白く濁った水の中をポーフラが2, 3匹浮き沈みしている。が、そんな事を気にしている場合では無い。早く水が飲みたいので⁽¹⁰⁾ポーフラが底に沈んだ時を見計らって、上の方だけ2, 3口飲んだ。またこの付近の水は石灰が多く含まれていて生水を飲むとすぐ下痢をする。それを覚悟で飲むのだ。沸かして飲む時間は無いのだ。古兵たちはその間に牛や豚、鶏とか穀物等^{りょうまつ}糧秣収集してきた。そして隊列を組んで中隊へと帰路につく。途中、案の定自分は下腹がキリキリと下痢の症状が始まった。そんな時は帰る道順の先頭より10メートルほど先へ走って行き、道路よりちょっと離れた田んぼや物陰で便をして部隊が来たら列に入って付いて行く。何人もの兵隊が同じような行動をとっている。こうした討伐と言う⁽¹¹⁾ゲリラ的戦略で、敵を攻撃したり⁽¹²⁾戦利品として生活物資等を度々調達した。

-
- 1 討伐...軍隊を送り、抵抗するものを討ち滅ぼすこと。
 - 2 糧秣...軍隊での兵と馬の糧食
 - 3 軽機関銃（軽機）...一人で持ち運び操作できる機関銃。
 - 4 上官...上級の官職。また、その人。
 - 5 狼煙...急ぎの時の合図に、薪を焚き、または筒に火薬を込めて上げる煙。
 - 6 至近弾...直撃はしなかったが、爆風や破片などで何らかの被害が及ぶ可能性のある範囲内に落ちた弾のこと。
 - 7 斥候兵...敵状・地形等の状況を偵察・捜索させるため、部隊から派遣する少数の兵士。
 - 8 援護射撃...敵の攻撃から見方を守るために、側面や後方から射撃を行うこと。
 - 9 衛生兵...軍隊において、医療や衛生管理に関する業務を行う兵士。
 - 10 ポーフラ...蚊の幼虫。水中に住み、体は短い棒状で、くねくねと運動し浮き沈みする。
 - 11 ゲリラ...小部隊による奇襲などで敵を混乱させる戦法。
 - 12 戦利品...戦争で、敵から奪い取った物品。

軍隊生活

岡田良平さん

昭和19年の夏，大東亜戦争の戦火は，激しさを増していた。

私は，今の韓国釜山の第七小学校で徴兵検査を受けた。判定官から「第一乙種合格」の判定を下され，当時では名誉な帝国軍人の卵が誕生したのである。人々の励ましに答え，「大東亜戦争の激しくなる中で，軍人として召されることを光栄に思い，大日本帝国の防波堤になる覚悟で戦ってきます」と決意を述べ，祝入営のタスキを掛け，奉公袋を持ち，万歳の声に送られ集合場所に向かった。敬礼をして両親や見送りの人に別れを告げ，点呼を受けて携行品を受け取った。ベルトは布製，帯剣の鞘は竹製，背囊は無く，驚いたのは水筒が竹製で，銃は38式という様にならない帝国軍人の姿であった。物の不足が軍人にまで及んでいることを感じた。号令と共に進軍ラッパが鳴り，120名余の隊列が校門を通過して大庁町の坂道に出た。万歳の声が聞こえて振り返ったが，既に校門は閉じられ，腕章をした憲兵が立っていた。私たちの隊列は電車通りに沿って，釜山駅を過ぎ栈橋に着いた。

その日の夜中に出航し翌朝下関港に停泊。行先も知らされないまま，直ぐに窓のない貨物列車に詰め込まれ徳山駅に着いた。駅から櫛ヶ浜くしがはまにある兵舎まで歩き，それぞれ各班に配属され，翌日の計画，日課，規律，注意事項



等を聞いて床に就いた。軍人としての初夜，これからのことを考え，目をつむっても寝付かれず，色々な思いが巡り，巡回の足音を幾度聞いたことか。翌朝，初年兵集合が掛かった。部隊長が式台に上がるのを見て号令を掛け，私は駆け足で部隊長の前に立ち，「申告します。岡田二等兵ほか125名は，4月13日付けをもって，船舶1215部

隊に入隊を命ぜられました。ここに謹んで申告します。」と申告、ここに大日本帝国軍人が誕生したのであった。翌日から初年兵教育が始まった。学校時代の教練の繰り返しがほとんどで、苦とは思わなかった。特に、船舶兵であったので、手旗の訓練は厳しかったが、海洋少年団で手旗は鍛えられていたのですぐに覚えて慣れた。覚えの悪い者には容赦なく体罰があった。海辺に近い兵舎だったが、訓練中に一度も船に乗ること無く、行方も知らされず下関に移動した。

ある日のこと、⁽⁵⁾曹長から指揮班に入るように言われ、部隊の事務を執ることになった。指揮班では恵まれていたが、班に帰ると、人格も人権も問答無用で、個人の行動がその時々上官の目にどの様に映ったか、上官の心情がどうであったかで体罰が行われた。それは「上官の命は天皇陛下の命である。」と言う⁽⁶⁾軍人勅諭が絶対的な規範としてあるからである。またある日、空襲警報が発令され、暗闇の中を完全武装して集合した。この警報が鳴ってから時間は経っていないのに、もう豊後水道側からB29が山の上に飛来しており、サーチライトに照らし出され、あちらこちらから砲火の赤い塊が火花のように交差しながら敵機を追っていた。突然、照明弾が落とされ真昼のように街並みが映し出されると、あちらこちらから火の手が上がり、炎が関門海峡の海面に映り余計に被害の大きさを感じた。応戦する我が軍機も⁽⁷⁾対空砲火もなく、明かりを消してじっと耐えて敵機の行き過ぎるのを待つ防空体制を見せつけられ、戦争がこんなに身近に迫って来ていると実感した。

下関での生活も僅かな期間であったと思う。また行先も知らされず、貨物列車に乗せられて^{はぎ}萩へ移動した。初めて軍隊が来たと言うことで、沿道には多くの人が日の丸の小旗を振って出迎え、緊張もしたが誇らしくも感じ町を行進して宿舎に落ち着いた。昭和20年5月頃は、既に日本の空と海はほとんどアメリカに制覇されていた。当時、物資食糧等の不足は満州・朝鮮からの海上ルートで輸送されており、輸送基地で朝鮮に近い港は爆撃され使用不能だったため、西日本で軍事物資の中継地として使用可能な^{はぎ}萩港が選ばれた。私たち船舶部隊の役目は、この港から徴用された⁽⁸⁾機帆船と乗組員で編成され

た輸送船団を護衛し、物資を陸揚げして目的地に送り出す荷役作業であった。⁽⁹⁾船倉から大豆の袋を2人掛りで持ち上げ、人の背中に乗せて運搬させるため、袋に穴が空き大豆がこぼれ出すことがあった。当時、⁽¹⁰⁾耐乏生活を強いられていた国民には、このこぼれた大豆でも貴重な食料源で、運搬が始まると競って破れた袋を目当てに人が増えてくる光景を見ると、食糧事情の⁽¹¹⁾窮乏を実感し、わざと穴を広げ大豆を落としながら重い袋を背負って歩いたことを思い出す。

終戦間近のころは、朝鮮海峡も⁽¹²⁾風雲急を告げていた。運搬船の入港もたまにしかなく、したがって運搬作業もたまであり、兵隊の士気を鼓舞するため銃剣術の大会があったのを覚えている。8月1日付けで幹部候補生の発表があり、私は5名の技術幹部候補生の1人に選ばれ、一躍4階級上の⁽¹³⁾伍長の襟章と座金が軍服に輝いた。発表の時の話では、技術幹部候補生は広島⁽¹⁴⁾の陸軍工廠で訓練を受けると聞いていたが、全員が⁽¹⁵⁾萩市の対岸の越ヶ浜の旅館に集められ訓練が始まった。そこで「広島に黄色の爆弾が落とされたそうだ。」と言う話を聞いたが、それが原子爆弾であった事などは知らされなかった。

それから、終戦の玉音を聞くことも無く、かやの外で終戦の知らせを聞き、意気に燃えていた候補生たちは嘆き、血の気の多い仲間が「1人になっても戦うのだ。」と信じられず迷っていた者もいた。9月8日に解散式が行われ⁽¹⁵⁾除隊になり、これからどうすれば良いのか何処へ帰れば良いのかと、頭はいっぱいであれこれと迷った。生きて帰れないと思って入隊したのに、戦場にも行かず、内地にいても爆撃に合うことも無く、幸い生きていた。しかし、敗戦で、生まれ育ち家族と再会できた釜山はすでに外国で、日本人は引き揚げねばならず、惨めな家族全員のゼロからの出発が待っていたのである。生きることの苦しさで、生きて帰ったことを恨んだこともあった。引き揚げ当時は生きることが第一で、戦争がいかに愚かであったかを感じ戦争を憎んだのは、時間が経ちいろんな話や情報を知ってからだったと思う。

戦争は前線で戦う軍人ばかりではなく、広島・長崎の原爆をはじめ、沖縄での戦い、本土空襲でも非戦闘員の多くを殺し、また、相手国の軍人も非戦闘員も被害をこうむる

のであって、いかに戦争が愚かで惨めであることが。

-
- 1 入営...兵役義務者または志願兵が、軍務に就くために兵営（軍人が集団で居住する所）に入ること。
 - 2 奉公袋...召集の際に兵士が持参する袋で、印章、軍隊手帳、貯金通帳、遺書、遺髪、召集令状などの入営に際して必要なものを入れて携行した。
 - 3 背囊...軍人・学生などが物を入れて背に負う方形のカバン。皮・ズックなどで造る。
 - 4 38式...三八式歩兵銃。明治38年に正式化された旧日本陸軍の歩兵銃。
 - 5 曹長...軍の階級の一つ。下士官の中では最上位の階級。軍曹の上。
 - 6 軍人勅諭...明治15年(1882)明治天皇から陸海軍人に与えられた勅諭。旧陸海軍人の精神教育の基本とされた。
 - 7 対空砲火...航空機に対して行われる、火砲による攻撃である。
 - 8 機帆船...発動機と帆を備えた小型の木造船。
 - 9 船倉...艦船内の上甲板の下の、貨物を積み込むところ。ふなぐら。
 - 10 耐乏...物資の乏しい状態を耐え忍ぶこと。
 - 11 窮乏...金や物品が不足して、生活に困ること。
 - 12 風雲急を告げる...今にも大きな変動が起きそうな、さしせまった情勢であること。
 - 13 伍長...軍の階級の一つ。下士官の中では最下位の階級。軍曹の下。
 - 14 工廠...軍に直属し、兵器・弾薬を作る工場。
 - 15 除隊...軍人が負傷・兵役の満了、あるいは懲戒などにより、軍隊を辞めること。退役ともいう。

私の海軍生活

渡 邊 莊 さん

私は自分が軍人に向いているとも軍人になりたいとも思っていなかった。大学も文学部哲学科，嵐山の禅寺に下宿させてもらい，小僧さんのすることを真似していた。それが徴兵検査で第一乙種合格となり，セーラー服も愛らしい海軍二等水兵となった。

万事戸惑うことばかり。まず玄米食に強烈パンチを喰らわされた。この健康的な主食は昨今の圧力釜によるものよりずっと硬く，良く噛まないで腹をこわし，良く噛むと歯を痛める。私は腹の方を大切にしたので歯が痛くなり，病室に出頭した。軍医殿はしげしげと診察したあげく「貴様，歯はどこも悪くない。それが痛むのであれば，原因はどうやら耳にある。耳たぶの膨らみが怪しい。じっとしておれ。」と言って，私の左耳たぶの一部を切り取った。中には白い脂肪の塊があった。

ところが，病状は一向に改善されず，逆に頬が脹れてきて，他の軍医から「これはお多福かぜじゃ。」とされ，入室の憂き目をみることとなった。その後出会った時，例の軍医中尉は苦笑いしていた。この耳たぶの切り傷が海軍生活で受けた私の唯一の公傷である。

昭和19年2月，予備学生に任官し，同輩は横須賀に近い武山の学生隊に移動したが，私は流行性疾患の疑いありということで（のどが少し赤かった），みんなと一緒に武山へは行っただが，その病室に入らねばならなかった。細菌培養の結果マイナスと判定されるまで出られない。ここでは食事の配膳は同じ入室者の若年兵が担当するが，兵長や上級水兵の飯はうず高く盛り上げられ，自分たちの食器にはその半分以下しかよそわない。陛下の赤子としてお国のために身命を捧げた者同士であるのに，実に異様な光景であった。学生隊での5カ月余りの基礎教程はしごきの連続，苛烈な戦闘が待っているのだから当然のこと。将校学生らしからぬ者がいるとて隊長から罵倒されたり，お互いに向き合っただけの練習をさせられたり，朝食前に吊床を担いで広大な営庭を駆け足

せられたり、あげればきりが無い。その頃同じ班のものと一緒に撮った写真を郷里に送ったが、どれが私か誰にも分からなかったという。まっ黒に日焼けした白い訓練服の若者ばかりなので。圧巻は真夏の炎天下、完全武装で分隊対抗の競争をさせられた。なんとこの凄惨な競技で我が八分隊は全学生隊12ヶ分隊で1位となったのだから呆れる。^{あき}

次の術科教程では航海学校を選んだ。海原を自分の腕で船を操って行くなど男冥利に尽きるではないか。ところが、私が六分儀⁽¹⁰⁾で星の高度を測り、地球上の位置を計算している間に、戦況は深刻極まるものとなっていた。

歓呼の声に送られて郷里を出た頃から、南太平洋では死闘が続き、拠点は次々と奪われて劣勢は顕著となり、航校へ進む一週間前、7月7日サイパン島では玉砕していた。

サイパンから東京までは2,250キロ、丁度完成していたB29爆撃機にとって格好の空襲コースとなり、私が航校を卒業する1ヶ月前頃から頻繁に用いられ、その度に日本では焼野原が広がった。



12月25日、航校卒業で少尉に

任官したが、私は大竹の海軍潜水学校で特修科学生となった。他の多くの者と同じく実施部隊に配属されたかったが、如何せん、その頃水上を航走する艦艇は大半が失われており、水中を潜る船しか行き場がなかったわけ。

潜水艦はもはや船ではない。機械そのもの。機械の中に人間が入り込んで動かす。乗組員は全てベテランでなければならない。一人のちょっとしたミスが全員の死をもたらすのだから。

ここではもう一人前の士官であったので、待遇も格段に良くなり、外出したら岩国やおおはた⁽¹¹⁾大畠で、物資不足の銃後社会でそこだけは酒肉のあった水交社別館⁽¹²⁾で、したたかに飲食した。流行歌に造詣の深い戦友のノートから「幻の影を慕いて」とか「祇園小唄」など^{ぎおんこうた}

を写し、熱心に曲を覚えていた。

昭和20年4月、米軍は沖縄本島に上陸し、「戦艦大和」も徳之島沖とくのしまで海底に沈み、我々は最後の持ち場として、横須賀特攻隊付を命じられた。2人乗りの特殊潜航艇「海竜」に搭乗する。予科練から回ってきた可憐なかれん一飛曹(13)が艇付(14)。本土決戦に備えて水際で敵艦船撃滅が任務。もちろん「我々の生命と引き換えに」である。

8月4日、隊長から引導(15)を渡された。「舵かじを少しは振らせても良い。吸排気筒を出して露頭(16)しても良い。何百隻という船団の中へ突っ込むのだから目標はいくらでもある。安全解脱切片(17)を外し、レバーを引きさえすれば輸送船撃沈は簡単なことだ。その時まで

に事故で艇を沈めるなど絶対にあってはならぬ。」

8月15日正午、玉音放送があるから軍装略綬(18)にて参列せよとの命令が出たが、あいにく二種軍装は洗濯に出していたので私は出席できなかった。私の海軍生活に終止符を打ったのはこの放送であった。英霊諸兄(20)(21)に合掌！

-
- 1 公傷...公務中に受けた傷。
 - 2 同輩...地位・年齢・身分などが同じくらいの人。
 - 3 流行性疾患...ウイルスに感染することで引き起こされる疾患。
 - 4 陛下の赤子...戦前、日本国民は天皇陛下の子供とされていた。
 - 5 しごき...厳しく鍛錬すること。
 - 6 苛烈...きびしくはげしいこと。
 - 7 罵倒...激しい言葉でののしること。
 - 8 吊床...吊り下げた寝床。ハンモック。
 - 9 営庭...兵営の中の広場。
 - 10 六分儀...60度(円周の6分の1)の円弧と小望遠鏡・2個の平面鏡からなり、天体の高度を測るのに使う器械。船の位置を測定するのに用いる。
 - 11 銃後...直接は戦争に参加していない一般国民や国内のことをさす。
 - 12 水交社...明治9年(1876)に創設された旧日本海軍高等官の親睦および研究・共済を目的とする団体。
 - 13 一飛曹...旧日本海軍の階級の一つ。一等飛行兵曹の略。
 - 14 艇付...乗組員。
 - 15 引導を渡す...死を逃れられないことを相手にわからせること。
 - 16 露頭...頭をむき出しにしていること。
 - 17 安全解脱切片...命中までは、衝撃を受けても爆発しない様、信管の作動を停めておく器具。

- 18 軍装...軍服を身に付けること。
- 19 略綬...勲章や記章の代わりに着用する綬（リボン）のこと。
- 20 英霊...死者。特に戦死者の霊を敬っていう語。
- 21 諸兄...同輩あるいは近しい先輩などに対して、敬愛の気持ちをこめていう語。

従軍記

沖 悦 子 さん

これは、御家族の自分史の一節で、第7戦隊浜松飛行戦隊で将兵等を輸送する任務に就き、最後の搭乗について書いた場面です。

忘れることの出来ない最後の飛行は昭和20年4月24日。(運送屋廃業日と記憶する。)この日、4月というに5月中ごろの霞^{かすみ}の多い好天気。昨日インコウ⁽¹⁾より開城⁽²⁾に着き、十分な睡眠も取ったし体調共に良好だし、今日は嘉手納^{かてな}往復だけで離陸時間も9時の予定と言う事もあり、久しぶりにのんびりと朝食にありつく。いつもの事ながら、

我々4名の仲間(戦友)は機長たちとも他の搭乗員とも離れた場所に陣取りのんきに馬鹿な話ばかり言い合っている。煙草の支給が多いのかいつも誰かの煙草が



くゆっている有様だ。今日も恩賜⁽³⁾の煙草を頂くが、まだ生きている。出発時刻が近づくが、将兵の姿が見えなく、糧秣^{りょうまつ}と弾薬の準備のようだ。兵士が各機に5、6名乗り込み10分遅れて離陸する。上空に雲一つない飛行日和だ。脇から機長が「こんな日には注意して飛べよ。」と忠告してくれる。9機1波の編隊飛行で我が機は6番に位置する。敵機の姿も見えず、沖縄の島もかすかに見え始めた時、伝声管⁽⁴⁾に「南方より敵編隊北上中、嘉手納^{かてな}着陸を北飛行場に変更せよ。」の指令があり、我々は即座に着陸姿勢に入るが、いまだ私も機長もこの飛行場は初めてのこと。着陸可能なのか？我が機はしばらく上空で旋回待機が続く。滑走路は短く、端は海だ。「制動を掛けねば駄目だぞ。」と機長の声を耳にしながら、早めに2速に落とす。上出来の着陸だが、誘導する兵士の姿は無く、慌ただしい場内の動きが見える。

9番機も着陸する。走るトラックの上から2, 3名の兵士が声を限りに何やら叫んで通り過ぎるが聞き取れない。2, 3分後「弾薬を降ろし, 速やかに空中分散せよ, 敵機接近中。」と伝令が伝えて, また走る。バラバラと多くの兵が駆け寄り, 弾薬を運びだし, 糧秣りょうまつは機上より放り出すが, 我々の全機には帰り着く燃料がない。隊長機に連絡に出ていた機長が息せき切って帰り, 「燃料の続く限り陸地に飛ぶ。」と地上兵に合図する。全機始動に掛かり, 空ぶかしすることも無く, 我先にと飛び立つ。200mも昇



った頃, 機長は「高度はここまでに針路北に取れ。」と言う。1番近い陸地は中国大陸しかない。私は何となく敵に遭遇する予感がわいてきて, 銃座に着くことを進言した。機長も私の意見に同意し, 「速やかに配置に着け。」と命じ, 「操縦代わるぞ。」と直に桿(5)を持ってくれる。離陸後, 5, 6分飛行したころ, 機長が「来たぞ」と大声を出す。前上方30度

にP38の15, 6機の群れを見る。⁽⁶⁾我々より先に離陸した5機が7~800m前を高度も区々まちまちにまともに飛び込んでいく。頭上の敵機に気がついていないのか。危ないと思う間もなくその1機が垂直になり, 落ちて行く。続けざまにまた1機が真っ赤な炎を上げる。雀すずめは上に下に飛び交う。炎はアッと言う間に広がり, 黒煙を引いて落ちて行く。機長は「駄目だ。」と言うが早いか180度針路を変えて高度を100mまで降ろす。不運にも雲一つない。突然, 曳光弾(7)の帯が顔面を1条2条と掠め飛び, P38が側方を急上昇する。機銃音がバリバリと聞こえるほど近くだ。我が機首も尾座(8)の機銃も負けじと一斉に火を噴く。我が機はさらに30mまで下げる限界高度だ。これ以上降ろすと水を被る。

プチプチと張り詰めた紙を針で突き刺すような異様な音を耳にする。大きく機を振る

動作をしているようだが、重いので動きが緩慢だ。また尾座の機銃がババババンと休みなく^{うな}唸る。敵機は我が機を笑うがごとくに悠然と我が機の真横を飛び過ぎる。機首の機銃がそれを追うかのようにバリバリと鳴るがこれも無駄だ。よく我々の弱点を知っての攻撃だ。5、6分の戦いか30分の戦いか分からない。前、上下、左右と血まなこに見張る目に島影を洋上に見る事が出来た。敵機の姿もなくなり、機長が「済州島だが行き着くかな。」と口を開いてくれた。燃料は7速の全速飛行のため、指針0を示しており、2、3分持てば良いところだ。高度を最後の力で昇る。200m、250mで3速に落とす。半滑空⁽¹⁰⁾で飛行場が見えてくるが、滑走路の真ん中で1機のエンジンから黒煙を上げている。滑走路がふさがれていては、とても着陸は無理だ。「北まで飛ぶか？」と独り言を言う機長はまたまた上昇を始めるが50mも上がらず、高度は落ち始める。「全員安全帯を強く締めろ。」と重い口調で皆に指示する。小高い丘の向こうに飛行場が見える。完全滑空で、それも滑走路と進入角は90度も違い、進入角を合わすため大きく旋回する。このままの飛行だと森に突っ込むと私は無造作に足を踏ん張った。最後の1滴の燃料か？エンジンはパンパパンの音を残して左が停止した。私は見開いていた目を一瞬閉じた。次の瞬間、機の下部をバリバリと松の枝^{たた}が叩く。ババンと右エンジンも停止し、1、2度翼を小枝^なが撫ぜるが何とか障がいの丘は乗り越えたようだ。一度車輪は接地したが砂地に潜り込み尾部が浮いて来る。瞬時に私は裏返ると判断して両手を前に突き出した。何のためか？後で考えるとお笑い草だ。が次の瞬間、バリバリでもなくベキベキでもない異様な音で機は大きく棒立ちで止まってくれた。2人の乗員は操縦室に4本の足を振り上げて安全帯で宙吊りの姿でいる。そんな事には目もくれず機長は「やっちゃった。」と頭を抱えて^{つぶや}呟き、私の顔を見る。私はよくぞここまで飛んで来ることが出来たと機長の的確な判断と技量に敬服する。

その後、幾度と危険な状況に追い込まれながら、昭和20年8月29日8時過ぎ、無事日本へ帰還されました。

-
- 1 インコウ... 營口。中華人民共和国遼寧省にある都市。
 - 2 開城... 朝鮮民主主義人民共和国の南部にある都市。
 - 3 恩賜... 君主から臣下などに対して、これまでの忠節や功勞を感謝するために与える物品。
 - 4 伝声管... 離れた場所と直接通話ができるように設けた長い管。船舶・航空機などで用いた。
 - 5 桿... さお状の棒。ここでは操縦桿のこと。
 - 6 P 3 8 ... ロッキード社が開発し、1939 年にアメリカ陸軍に正式採用された双胴（正確には三胴）双発、単座の高速戦闘機。
 - 7 曳光弾... 射撃後、飛んで行く間に発光することで軌跡がわかるようになっている弾丸のこと。
 - 8 機首... 航空機の胴体の前頭部。
 - 9 尾座... 軍用機の尾部に設置された銃座。
 - 10 滑空... 航空機のエンジン停止状態や遅い回転状態での飛行。

日本に引き揚げの前後

亀山茂弘さん

日本の敗戦時、陸軍軍人の私はソ連軍の捕虜⁽¹⁾となり、中国東北部（旧満州）の延吉収容所に収容され、使役⁽²⁾に従事していた。翌年の春に、身体検査の結果、私達のように痩せ細った者は中国軍に引き渡され、貨物列車で移送され、四平という街に到着した。この時に、耳をつんざく鉄砲の響きで中国軍と国府軍が内戦の真ただ中であることを知り、使役に従事して犬死すれば野獣の餌になるだけだと思い、逃走を重ね病魔に侵されていたところ、公主嶺⁽³⁾の日本居留民団に救護された。

2か月後、民団が日本引揚命令を受けたので仲間入りさせてもらい、無蓋列車で錦州を通りコロ⁽⁴⁾（葫芦）島に到着した。埠頭⁽⁵⁾において数度の身体検査を受け、岸壁に係留されている日本の引揚船に向かった。この時、多くの歩哨⁽⁶⁾の前を通り抜けるのだが、呼び止められ乗船拒否されると帰国の目途が無くなるのでひやひやしていた。日本船に乗船すると、「お帰りなさい。」という優しい言葉に安心感が込み上げ涙が滲み出た。

船中で数日後、「日本が見える。」という叫び声で多くの人がデッキに上がり周りを見ると、点在している美しい島々、「箱庭のような。」と歓声を上げて喜び合う。

船は佐世保港に入港（昭和21年8月31日）。引揚援護局で帰国の手続きを終え、翌日各自は帰宅のため国鉄佐世保駅に向かった。道中米兵と若い日本女性のにこやかなアベック姿を見ると複雑な気になる。また、道中道端で売っている美味しそうな饅頭⁽⁷⁾を見て2個買い、さつま芋の蔓⁽⁸⁾で拵⁽⁹⁾えたあんころであるが、久しぶりに食べる饅頭の味は甘くて頬が落ちるほど美味しく感じられた。

汽車に乗り本籍地の倉敷市玉島に向かう。車中から眺める都市は空襲で焼け野原になり、バラック⁽¹⁰⁾が点在している。金光駅で下車し、2キロほど歩いて玉島の叔父の農家に到着した。叔父夫婦は、痩せ細き体に中国服姿の私を見て喫驚⁽¹¹⁾したが、親切に扱ってくれた。従兄弟で郵便局員と石工職人の消息を尋ねると、「2人の息子は白布で包まれ

た木箱⁽⁷⁾の中で帰ってきました。」と叔父夫婦は話して涙顔になる。

2 か月ほど保養すると健康を回復し，11月から笠岡市の干拓工事に従事する。私は学生時代，岡山市駅元町内で下宿していた。関西中学校時代を回顧し，昭和22年の桜の花が咲き始めた4月に汽車で岡山駅に向かった。市内は米軍の空襲で焼け野原になっているが，小さなバラック建が連なっている。駅前で14，5歳の子供が，4，5人通行人を呼び止め靴磨きをしている。聞くと，空襲で家や家族を失い街頭でくらすようになり，靴磨きをして駄賃⁽⁸⁾をもらい生活している戦争犠牲者であると判明した。駅前の闇市に足を入れると，衣類や白米の御飯や豚汁など多くの品が手に入るが値段は高かった。

昭和21年3月3日に物資不足，食糧難時代に経済秩序を維持する目的で物価統制令⁽⁹⁾の勅令が施行された。主食の米麦，衣類，油など多くの品々が配給制度の時代であった。食糧難の折から，岡山県内には，姫路・大阪方面から食料品の買出しの人が殺到し，午後からの上り列車は食料品の米類が担ぎ込まれ混雑していた。一般買出し人は両手で提げるほどの荷物を運搬しているが，悪質ブローカー⁽¹⁰⁾になると，1人で1包⁽¹¹⁾(1斗入り白米)の紙袋を4，5個，他人の迷惑も考えずに乗客の座る座席の下に押し入れる横暴者もいた。岡山駅西口駅元町に回り，私が学生時代に下宿していた跡地に足を踏み入れ消息を聞いたが確証を得ることは出来なかった。

戦争に巻き込まれ，被害を被るのは一般市民である。人類の敵は戦争である。世界ではイデオロギー⁽¹²⁾，宗教や民族などが^{もつ}纏れ合い，激しく対立が続き，戦争となる兆しが絶えることがないのが残念で堪えられない。

-
- 1 捕虜...戦争などで敵に捕えられた人。
 - 2 使役...人を使って何かをさせること，働かせること。
 - 3 無蓋列車...屋根のない貨車。
 - 4 歩哨...兵営・陣地の要所に立って，警戒・監視の任にあたること。また，その兵。
 - 5 バラック...急造の粗末な建物。仮小屋。
 - 6 喫驚...驚くこと，びっくりすること。
 - 7 木箱の中...戦死した。戦死した兵士の遺品・遺骨は木箱に収められ家族のもとに送られた。戦況が悪化するにつれ，遺品を収めることができず空の木箱が返ってくることもあった。

- 8 駄賃...、簡単なことを頼んだときに、その労力に対して与える賃金。
- 9 物価統制令の勅令...闇市などで物品が不当に高騰することを防ぐために制定された法令。
- 10 ブローカー...売買を仲買する人。
- 11 斗...容積の単位。1斗は10升，約18リットル。
- 12 イデオロギー...思想の体系・傾向，物の考え方。

パラオ戦記

守分勝政さん

先日、今年4月に天皇皇后両陛下が、戦没者を慰霊⁽¹⁾するため、パラオ共和国を訪問することが決定したと発表された。

昭和19年8月下旬、私はパラオ守備の海軍第30根拠地隊の主力戦闘部隊である第45警備隊指揮下の本島南部にあるアイライ⁽²⁾高角砲台の分隊士として、連日豪北方面から飛来する米軍大型爆撃機の大編隊を迎撃、爆弾の炸裂⁽³⁾、雨の如き銃撃、吹き上がる硝煙⁽⁴⁾の中、激しい対空戦闘を行っていた。

7月、既にサイパン、グアムを制圧した米軍は、フィリピン奪回をめざし、まず陸上航空基地を求めてパラオに來襲することは必至の状況にあった。果たして9月7日、夜明け

とともに東方海上に敵艦船群を発見、空母11隻を含む艦艇、輸送船100隻以上の大攻撃部隊の來襲である。フィリピン作戦の先駆として予期されていたパラオ防衛戦の幕が切って落とされる。次々と発進する艦載機数十機の大編隊が我が砲台に殺到する。数十機づつが我が砲台めがけて銃撃しつつ急降下、爆弾を投下し東方海上に逃れて行く。

我々を掩護⁽⁵⁾して友軍の機銃砲台も一斉射撃を始める。轟音天地を揺るがす。決死の興奮か、何も考える余裕なし、砲台全員阿修羅の如く対空戦闘を継続す。敵軍機は終日パラオ本島上空を乱舞⁽⁶⁾して、弾薬、食糧、燃料等の集積個所に徹底攻撃を行い、全島⁽⁶⁾火炎と濛々たる硝煙に覆われる。地獄の戦場に夜が訪れ、敵機の攻撃も散発的となる。全員気を取り直して、戦死者の収容、病院移送、戦死者の埋葬を行う。



9月15日、米軍は本島の南40キロの南洋最大の飛行場のあるペリリュー島とその南のアンガウル島に上陸を開始する。⁽⁷⁾ 凄絶極まる砲爆撃下、中川大佐指揮の水戸歩兵第二連隊を基幹とする陸海守備隊1万は、当時世界最強の軍隊と豪語する第一海兵師団（ファーストマリーン）4万を迎撃⁽⁸⁾、猛烈果敢なる反撃に出る。⁽⁹⁾ 陸軍南方総軍より「我に救援の手段はなく⁽¹⁰⁾ 徒⁽¹¹⁾に貴軍の孤軍奮闘を祈るのみ。」、また⁽¹²⁾ 連合艦隊から「南西方面部隊をして作戦支援を命じたるも、その航空兵力不足にして貴軍の期待に副えざるを遺憾⁽¹³⁾とす。」との電報が来る。今更何に頼らん、守備隊の闘魂更に燃え上がる。高崎十五連隊飯田大隊の逆上陸、海軍水偵2機による夜間決死の爆撃に米軍海兵隊は死傷者50%を越え、遂に⁽¹⁴⁾ 戦線離脱。陸軍第81師団と交代する。圧倒的物量を前に死闘2か月余り、守備隊は11月24日遂に最後の時を迎える。中川大佐は残兵55名に遊撃戦を命じ、守備隊の最後を示す暗号「サクラ、サクラ」を集団に⁽¹⁵⁾ 連送し、自決する。

更にもう1つ述べたい事、それはパラオでは將に軍民一致団結の戦いであった。しかし、ペリリュー島では既に民間人の安全を願って本島に送っており、残った青年男女は軍と共に戦い抜いたのである。女性グループの一群は洞窟にこもり銃を取り、勇敢にも米兵を狙撃してきたのを見たとの米軍の証言もある。また、アンガウルでは隊長後藤少佐は、共に戦いたいと言う島民に「死ぬのは軍人だけでよい。みなさんは安全地帯で生き残り、米軍の保護を受けなさい。」と前線から退避させたとのこと。

11月以降、主戦場はフィリピン島に移るも、一艦一機の補給無き守備隊に⁽¹⁶⁾ 飢餓との戦いが始まる。さつま芋の葉が塩汁に浮かぶその下に米粒少しが普通。全員次第に痩せ衰えて行く。これ將に飢餓の様相か。荒れ地を耕しても何もできない。何とかかんとか食べそうなものを探してくる。バナナの花、茎、根、⁽¹⁷⁾ ビンロー樹の芽等、犬猫も、ヘビやトカゲも姿を消し、それでも⁽¹⁸⁾ 頑張^{ようや}って^{かぼちゃ} 漸く畑に南瓜、タピオカ、パパイヤが少で⁽¹⁸⁾ きるようになる。夜間時折り銃声が響く。各部隊はそれぞれ食糧庫や畑を守る。軍紀⁽¹⁸⁾、軍律もない事件も増えてくる。しかし、この苦境の中でも陸海守備隊の戦闘態勢は厳として保たれ、愛する祖国のために戦い抜かんの闘魂に少しも揺るぎはなかった。

司令部は全軍をあげて二島奪回作戦を考えていた。

昭和35年，陸海の生還軍人及び民間人，更に共和国の人々の献金により，旧南洋庁があったコロール島に戦没者の慰霊碑を建立した。碑石には日英両文で次の言葉が刻まれている。

「第二次世界大戦における有数の激戦地，このパラオで亡くなられた日米両軍の兵士及び民間の人々の御霊の冥福と永遠の平和を祈願する。これらの死は決して無駄ではなく，今日の世界平和の礎となったものと信ずる。」

-
- 1 慰霊...死んだ人や動物の霊を慰めること。
 - 2 高角砲...敵の戦闘機を撃墜するために地上や戦闘艦艇に配備された火砲。
 - 3 豪北...オーストラリアの北方。
 - 4 硝煙...火薬の発火によって生じる煙。
 - 5 阿修羅の如く...激しく戦う様子のたとえ。
 - 6 火焰...ほのお。
 - 7 凄絶...非常にすさまじいこと。
 - 8 迎撃...攻めてくる相手を迎え撃つこと。
 - 9 猛烈果敢...勢いが激しく，大胆この上ないこと。
 - 10 陸軍南方総軍...太平洋戦争において，東南アジア方面全陸軍部隊を統括する総軍として，大陸命第555号に基づき昭和16年(1941)11月6日に編成された。開戦後は一連の南方作戦を指揮し，また戦前より日本領である南洋群島や，同盟国においても防衛・軍政の任に当たった。
 - 11 孤軍奮闘...援軍もなく孤立した中で懸命に戦うこと。
 - 12 連合艦隊...旧日本海軍が戦時，事変，演習の際に艦隊2個以上をもって編制した艦隊。日清戦争に際して初めて編制され，1933年以後は常時編制となった。
 - 13 遺憾...期待したようにならず，心残りであること。残念に思うこと。
 - 14 戦線離脱...戦闘を交えている地域から離れること。
 - 15 自決...自分の手で生命を絶つこと。自殺。自害。
 - 16 飢餓...食べ物がなくて飢えること。
 - 17 ビンロー...ヤシ科の植物。
 - 18 軍紀・軍律...軍隊の風紀と規律。

海軍航空隊整備兵

匿名希望

16歳から⁽¹⁾徴用と言って、広島県の広村にあった第11⁽²⁾海軍航空廠で無線の修理を行っていた。ここにいたのではいけないと思い、18歳になってすぐに兵隊に志願し、試験を受けたら合格した。海軍航空隊整備兵⁽³⁾になるため、大竹海兵団で3ヶ月間の新兵教育を受けた。そこでは、「死ぬ」ということはなんとも無いということをおぼえられた。30人一組で1人が失敗すると全員が罰を受けた。それは、野球のバット(木製)で尻をおもいきり3回叩かれるというもので、5回も叩くと死んでしまう。叩く場所が背骨にずれようものなら、背骨が折れて即死してしまうこともあった。背骨が折れるかバットが折れるかというくらいおもいきり叩いたので、アザでお尻が何日も真っ黒になり、皆お風呂で患部を揉んでいた。それに耐えられない者は、首を吊ったり、腹を切って自殺していった。とてもかわいそうだったが、その処分も自分たちでさせられた。それは激しいものだった。

新兵教育が終わると、今度は厚木海軍航空隊で4か月間、飛行機の整備兵となるための教育を受けた。飛行機のエンジンを分解したり組み立てたりして、一生懸命に修理に必要な技術を習得していった。そこでは、新兵教育の時のような暴力はなかったが、失敗するとすぐにビンタが飛んで来るといった状況で、指導が徹底していた。

4か月間そこで修業し、飛行機の構造を一通り覚えると、今度はいよいよ呉海軍航空隊に配属となった。そこでは陸上飛行機、⁽⁴⁾水上飛行機、戦体の真下に船の付いた戦闘機や、3人乗りの偵察機⁽⁵⁾などのエンジンの修理を行っていた。ある日突然、B29が飛来し、何か黒いものが落ちてくると見ていると、「ドンドンンドン」と大きな1トン爆弾が落ちて来て、滑走路にいくつも直径10mの大きな穴を開けた。爆弾の爆風により割れた窓ガラスや部品が飛んで来て、多くの死傷者を出した。その中で1人、腕組みをして⁽⁶⁾微動だにせず座っている者がいた。よく見ると爆弾で顎を吹き飛ばされ、大量の血

が流れていた。それから10分もしないうちにそのまま倒れて死んでいった。一度空襲にあうと、何十人と人が死んでいった。空襲から逃れるため、設置してある防空壕に逃げ込んだ。防空壕の形にも色々あり、入口から真っすぐに穴が伸びるものの場合、入口に爆弾が落ちると爆風が奥まで達し、多くの人の中で死んでいった。途中で曲がっているもの、地下へ伸びるものであったらまだ良かったが。また、真っすぐ伸びる防空壕では、入口に向けて20ミリ機関銃が一発発射されると、中で5人くらいの体を貫通し多くの人倒れていった。それは悲惨なものだった。

滑走路が使えなくなったため、今度は佐伯海軍航空隊へ配属となった。しかし、そこでも、陸にあった滑走路は米軍の空襲で使えなくなったため、水上飛行機への切り替えが行われた。⁽⁷⁾ブイを海上に浮かべ滑走路をつくり、そこから飛び立って行くようになった。水上飛行機だけに毎日エンジンの



点検が必要で、海の中に入りエンジンを分解して点検し、再度エンジンをかけて調子を見ていた。そんなある日、いつもの空襲であればB29の爆撃機がやってくるので気付くのだが、その日に限って中型の飛行機が海面すれすれを飛んできたため全く気付かず、音が聞こえて初めて気が付いた。急いで飛行機を退避させるため、搭乗員を呼びエンジンを始動させた。その時、自分もすぐに海に飛び込んで逃げればよかったのだが、翼につかまってしまい、海上から離水寸前に海に飛び込んだ。もう陸は見えないくらい沖合にいて、「死んでしまう」と思った。陸を目指し6時間くらい泳いだところで漁船に助けられ何とか一命を取り留めた。

佐伯航空隊では、特攻隊を2回見送った。特攻隊の出撃は1度に10機。夜の12時に搭乗員10名を集めて御膳で御馳走を食べさせ、出発は1時間後。戦闘機は腹に10

0キ口爆弾を1つ抱え、投弾できないように細工されていた。時刻が来て、10機の特攻隊が出撃後、監視及び戦果の報告のため1機の偵察機が後を追う。偵察機は目標近くで特攻機に命令し、全てを見届けた後帰還してきた。しかも、特攻機には片道分の燃料しかなく、既に退路は断たれていた。とてもかわいそうで気の毒だった。

佐伯航空隊も使えなくなり、今度は山口県の大浦基地に異動となった。整備兵12名、搭乗員と10機の飛行機と共に行ったのだが、そこは20軒ほどの民家が軒を連ねる部落で、その公会堂を借りて1ヵ月ほど過ごした。しかし、そこも米軍に発見され、今度は3人乗りの偵察機でやって来て、30センチほどの1キ口爆弾を飛行機目がけて投げた。かと思うと、今度は逃げまどう自分たちに機銃掃射してくるのだった。

その後も各地の基地を転属し、最後にソ連軍からの本土防衛のため、青森県の下北半島にある基地に転属となり、そこで終戦を迎える事になったのだが、ここで最も忘れることができない経験をする事になった。そこも小さな部落で、公会堂を借りて20名の仲間とともに生活し、一たび空襲となれば周りの民家を守るという気持ちはあるのだが、敵も迎撃を警戒し、高空からではなく海面すれすれを飛行してやって来た。音がして初めて気付くという状況で、敵機はもうすぐそこまで来ていて、飛行機や逃げまどう人々に向けて機銃掃射した。自分は近くにあった大きな丸太を抱え、銃撃してくる方向にそれを向け、自分の身を守った。多くの方は防空壕に逃げたのだが、その中で機銃の犠牲となり、何人もが死んだ。20人いた仲間のうち、生き残ったのは7人だけだった。日付は8月10日、兵士も含め何十人という遺体を埋葬しなければならず、生きた心地がしなかった。田舎なので何もなく、幸いガソリンはあったので、畑の中に穴を掘り、遺体をその中に集めガソリンをかけて3日間以上かけて火葬した。その時忘れもしない出来事があった。1人の女性が地面を這って自分の所へやってきた。年齢を聞くと「20歳」と答え、女性は「兵隊さんは良い薬を持っているはずだから、その薬を塗れば治るかもしれない。」と言う。塗り薬程度しかないが「何処だ。」と聞くとお尻のあたりを見せた。見ると銃弾が当たらしく、お尻に人差し指くらいの穴が開いていた。「こ

の程度なら」と薬を塗ったのだが、体を仰向けにしてみると、腸や子宮が体から飛び出し、それを引きずって這って来たのだった。しばらくして、その女性は目の前で亡くなった。ここでの出来事は、本当に辛く悲しい経験で、夢にまで出てきたものだった。

最後の所属では、ラジオはなく連絡手段も何もなかった。そのせいで終戦を知ったのは10月の終わりごろだった。それまでは食べることに一生懸命で、貨物でやってきた旧日本軍の兵士に知らされた。それから佐伯航空隊まで帰ることになったのだが、お金も何もないので、やってきた人のトラックに7人乗せてもらい駅まで送ってもらった。聞けば、元兵士はタダで列車に乗れるということで、貨物に揺られ5日間かかって隊事務所まで戻った。道中、岡山駅、広島駅と通過したが、駅から遮るものがない焼け野原で、これから一体どうなるのかと思った。そのうえ、やっとの思いで着いた航空隊事務所はもぬけの殻で、命あった喜びからか、皆いち早く引きあげたのだった。すべてが終わり、家に帰り着いたのは年が明けた2月5日だった。

本当に自分でも良く生き抜くことが出来たと思う。亡くなった人は本当にかわいそうだった。仲良くしていた戦友は、体中を銃で撃ち抜かれ、見る事が出来ないくらいの有様だった。見た者でなければわからない。家に帰る時、軍服などを持って帰ったが、見るのが辛くて写真以外は全て焼いた。

-
- 1 徴用...戦時などに国家が国民を強制的に動員して、兵役以外の一定の業務につかせること。
 - 2 海軍航空廠...航空機の修理整備（末期には製造）を担当する航空本部所管の「空廠」。
 - 3 整備兵...軍用航空機の整備にあたる大日本帝国海軍の兵種。
 - 4 水上飛行機...水面上に浮いて滑走が可能な船型の機体構造、あるいは浮舟（フロート）のような艀装を持つことによって、水上にて離着水できるように設計された航空機。
 - 5 偵察機...敵性地域などの状況を把握するために偵察など情報収集を行う軍用機（航空機）のひとつ。
 - 6 微動だにせず...少しも動かない様子。
 - 7 ブイ...港湾などで、水面に浮かべておく目印。